

スマイル タウン

第333号

2025.6
発行

ひの社会教育センターは、市民のみなさまの
“やりたい”を実現し、「豊かなくらし」を応援する
施設として、1969年に日野市と（財）社会教育協会が
協定書に基づいて設立しました。
今月もセンターで生きがいづくりをされる沢山の
市民の方々の活動をお伝えします。



五感で楽しみながら
身につける

- 対談コーナー「わたしたちの社会教育」
- 社会教育コラム（社会教育協会より）
- 表紙の講師は…子どもクッキング 菊地なぎさ先生
- ひの社会教育センターからのご案内・賛助会・寄付お礼等
- 職員・スタッフの『わたしのサステナブル』コーナー

「わたしたちの社会教育」④

職員同士の対談形式で『わたしたちの社会教育』を語ります。昨年からは始まり、第4回となる企画。今年度は、職員研修の際に各職員が何に取り組み1年にするか年度目標を語った中から、手掛け、育てている事業の話をしします。

職員として、様々な環境、状況の中、悩みや葛藤を抱えながら、その意義や価値、成果を期待し、目標に進むありのままをお伝えし、社会教育施設の存在意義についても考えていきます。また、社会教育協会理事の荒井文昭先生（前・東京都立大学人文社会学部人間社会学科教授）にも同席していただき、荒井先生の視点から講評をいただきます。

今号はひの社会教育センターが日野市から受託運営している、日野市立みなみだいら児童館の職員・林美梨にひの社会教育センター副館長・山本江里子が「こども会議」の話を聞きます。

第4回テーマ

『児童館でのこども会議の運営』

●こども会議とは・・・

こども家庭庁のこども基本法に基づいた、こども・若者の意見を政策に反映させるための取り組みのひとつで、「こども会議」の実施に関するガイドラインも策定されている。

山本・・ではさっそくですが、こども会議って、どんなことをするんですか？

林・・こども家庭庁からのガイドラインで、児童館での取り組みとして「こども会議」の実施について策定されていますが、やり方の形は定まっていないので、試行錯誤中です。

山本・・これまでやってきたのは、どんな方法・内容でしたか？

林・・昨年度は、各学期に一度、実施しました。今年度は、月に一度行うことにして、毎月5〜6回『遊びタイム』という時間があり、毎月15

日に、翌月の『遊びタイム』の遊び内容を決めるといやり方で取り組み始めました。

※『遊びタイム』は、体育室で集まり、一つの遊びに参加して、みんなで遊ぼうという時間。提示する遊びに参加することで、集団遊びの経験や、きっかけを出して参加を促しています。

お便りや貼り紙で会議があることをお知らせして、当日いる子たちに声を掛けて集め、実施。今年度、毎月15日と決めたことと、「こども会議」という名前の硬さを感じていたので、「ぶらねつとミーティング」に変えたことで、浸透してくれるといいな、と思っています。

山本・・会議のテーマを決めることが大変そうですね。

林・・昨年度は、児童館でやりたいことを聞いたり、年度末には、ちょうど児童館についてのアンケートを取った時だったので、「困っていること」について共有しました。館内で危険だと思うことについて、解決方法を話題にしたら、意見が色々出てきました。

山本・・そういう場面では6年生がとりまとめている？

林・・学年はバラバラで、高学年がまとめる雰囲気でもなく、みんなから意見が出ます。

体育室での遊び方についての提案で、自分に関係のあることだったので、ヒントがあれば考えられることや、当事者意識が大事だなと思いました。

山本・・こども会議で、大人の立場として何か気を付けていることはありますか？

林・・否定せず、どんな意見も最後まで聞くこととです。

山本・・子どもたち同士もそれはできている？

林・・ルールとして最初にみんなに伝えていますが、人の意見をちゃんと聞くこと、「ダメな意見」はないこと、みんなのことを考えた意見を言うこと、というルール。

児童館のこととか、他の子たちのことも考えられるといいねっていうことは言っています。児童館には普段からポストがあつて、書いて出す方が言いやすいこともあり、意見を自由に入れられる準備はしています。

こども会議に、まずは慣れてもらって、子どもたちがそういう場なんだ、発言していい場なんだってわかっていくと、きつともっと面白くなるんだらうなと思います。

●こどもの声を聴くこと

山本・・林さんが子どものとき、そういう場には経験はありますか？

林・・私は児童館にはあまり行っていないのですが、学校で先生には気持ちや意見を言っていた方かなと思います。今は言えない子たちの方が多いのかな。

みなみだいら児童館でも、いつでも意見を言ってくるいいよって、ポストもそうですけど事務室の扉を開けています。本当は「会議」というよりも、よっぽど普段の方が子どもたちの意見を直接聞いていると思います。

山本・・現場レベルでは「子どもの声を聴く」とは、日常のコミュニケーションの中で取り組んでいるというところで、会議という形でやる意義を、疑問に感じられているのは、わかる気もします。

林・・児童館にはこども会議よりずっと前から『子ども実行委員会』があり、児童館でのイベントの時に、企画・準備などを中心になってやってくれます。

子どもたちの意見から生まれて、やりたいっていう子が意識的に来てくれるという意味では、すごくこども会議に近い、むしろ同じと言ってもいいぐらいの役割は果たしているんじゃないかなと思います。

学校ではなかなかみんなの前に立てない子が、そういうところでスポットライトを浴びることができるという意味ですごくいいなと思います。

山本・・日本人って会議が苦手と言われるのが、子どものころから経験を積み重ねると楽になると思いませんか？

林・・それもやる意味の1つだと思っています。ただ、勇気を出して言った自分の意見が、何かの形になったとき、それを子どもたちにフィードバックして、反映されたんだという、繰り返しが大変だと思います。

こども会議をやる上で、フィードバックまでやるのが重要と、研修でもよくいわれています。

その過程を経て子どもたちの自主的・主体性が育つのかな、と。

一方、そこまで形にするのが大変だという現実の壁にぶち当たります。他児童館なども悩みは同じようです。

山本・・同じ悩みを抱えている、他の児童館さんと情報交換をされている中で、成功例やいいヒントなども得られていますか？

林・・市内の児童館で、子どもたちとそうした場を持つことがうまくいって言われている館長さんがいらして。求心力があり、子どもたちへの言葉掛けなど、真似したくなるテクニクがあるらしく、見て学びたいと思っています。市内児童館の10館合同の研修で話を聞きたいくらいです。

でもそれは、普段からの関係性があるからこそできることだなと思っていて、わざわざ集めて、「会議」と名のつくものを設定しなくても・・・、という葛藤がまた生まれます。

山本・・今までのお話を聞いて感じたのは、林さん自身も迷いの中にあつて、こども会議って素敵！と思える段階にまだ入っていないのかな。

林…うーん、でも完成はないと思うんですけどね。正解とか完成はないだろうなと思います。自分の中でビジョンがそのうち固まってくるとは思っています。

山本…子どもたち同士、生活や遊びの中、対立や衝突の手前で、対話を始める、知恵を学ぶことの必要性が問われているのかもしれない。子どもたちも、そういうやり方があるんだって分かってくると、会議の積み重ねで、いい効果になっていくのかなと思います。子どもたちが「回避」の意味を知っていくことは、大きな意味があると思います。

林…実際は、「本音を聞く」のは、「表」の会話やなく、2人で遊んでいるときや、オセロをやっている時間とか、そういう「裏」の場面でポロっと出てくるんですよ。だから、日常的に大事にして、その子どもたちが意見を言える、自信になれるように積み重ねていきたいと思いません。

山本…今「裏」って言ったけど、きつと会議の捉え方が、「表」はこうあるべきって、私たちが知らないうちに感じてしまっていて、裏も表もないよって、自分の意見は表だからこそ出さなきゃダメっていうことを子どもたちにも伝えていかないといけないですね。と同時に対立しやなく対話だよということ、私たちが大人も改めて学びたいなと思います。

林…大人が始めから無理だと諦めてしまうようなことでも、子どもたちはユニークな視点で意見を出してくれます。その意見が、「もしかしたら、工夫次第でできるかも？」と、私たち大人のやる気を引き出してくれることがあります。やっぱり子どもたちの純粋な意見は素敵だし、いいなって思います。

山本…こんな会議、こんなテーマでやってみたいというのはありますか？

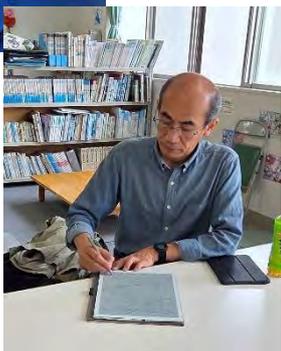
林…今はこちらで決めているキャンプの行き場所やプログラムとか、子どもたちと1から決めるのも楽しいだろうなとか、児童館の看板が古くなってしまったので、みんなで作るとか、みんなとやりたいなと今思い描いています。何かを作るためのゴールのある会議はかりイメージがちですが、これについて語ろうみたいな、哲学的な答えの出ない会議も設けたいと思っています。例えば社会的な問題や、なんで勉強しなきゃいけない？などの永遠の疑問、子どもたちにそうした問いを投げかけたら考えられると思います。意見が違っても、みんな合ってるんだって思える、そういう機会があると、ちよつと学校に行きたくない子とか、救われる子もいるんじゃないかなと。

反面、児童館には子どもたちは遊びに来るということが大前提で、会議をやる時間だから集まって！というのは、遊ぶ時間を奪ってまで必要なことかな、という難しさがあります。こちらが意図的に変えてしまうのは違うかな、と。

山本…まだまだ試行錯誤と迷いの中にいる様子ですが、今後の展望はありますか？

林…形だけ整えようとするのは簡単なこと。今は児童館内でも私一人で担当しています。誰でも関わって、誰でも出来る仕組みづくりをみんなで勉強したいなと思います。

児童館職員6年目の林、子どもたちのことを第一に考え、真面目に取り組むからこそ葛藤を抱え、悩みながらも前に進んでいます。



▲〈左上より〉職員の林、山本、荒井文昭先生

【荒井先生からの講評】

子どもが意見を表明することを、基本的な権利として保障していく。そのための実践と理論の構築が、求められています。けれども、子どもが保護される対象であると同時に権利の主体であることを理解し、実践することは、大人側にとって簡単なことではありません。子どもたちが児童館に「遊び」に来ているのは、どうしてなのでしょう。子どもたちも大人と同じように「追われて」生活していることが話題になりました。児童館のなかではホッとできたり、友だちとおしゃべりしたり、遊んだり、ケンカをしたりすることができる。これらのことが「楽しい」とは、どういふことなのでしょう。児童館で過ごす時間と空間は、子どもたちからすれば家庭や学校空間の映し鏡として存在しています。子どもの声をじっくりと聞いてあげること、そして職員側からの声かけによって、子どもたちは自分を取り戻していく基盤をつくっているのではないのでしょうか。話を聞かせていただいて、そんなことを考えました。

【社会教育コラム】

今号でご紹介した児童館の「子ども会議」のように、施設運営やまちづくりに子ども意見を取り入れる取り組みは全国的に広がっています。一方で、子どもの声を「騒音」とらえ、そうした苦情がもとで公園が廃止されるといった動きも出ています。

では、実際のところはどうか。明治大学の加藤拓巳准教授らのグループが、人びとは日常生活騒音と子どもの声を比較してどう感じるのか、検証を行いました(朝日新聞「withnews」2025年5月22日更新)。実験は成人250人を対象に、公園の動画に子どもの声と、生活騒音の代表として電車の音を入れたものを見てもらい、その後関連する質問をしてその回答を分析しました。

その結果、実験の参加者は、全体として電車の音よりも子どもの声について肯定的にとらえていたことがわかったといえます。例えば「この公園に魅力を感じるか」という質問に肯定的に答えたのは、電車の音では28.4%に対し子どもの声では41.4%だったとのこと。また、自由回答で公園の印象を聞いたところ、子どもの声を聞いた人は9.5%が「楽しい」という言葉を書きました(電車の音では0%)。

こうした結果から加藤さんらは、多数派にとっては子どもの声はむしろ魅力と感じる人が多く、それを無視して少数派の苦情を受けた政策を進めると、全体の評価とかけ離れる恐れがあり、苦情の発信元や理由を詳しく分析する必要があると指摘します。子どもに関わる施設の運営にあたって、大いに参考になりたいと思います。

星野一人(公財)社会教育協会事務局長



表紙の講師は…【子どもクッキング】月1回・土曜日(午前・午後)

講師 菊地なぎさ先生

入会待ち人数 NO.1 の人気クラス、『子どもクッキング』本業は管理栄養士として病院で働いている菊地先生に、子どもを対象とした料理教室を立ち上げないかと、声を掛けさせていただきスタートして 17 年目。

クラスは小学生が中心ですが、中学生も数名いて、長く継続する子が多いことも特徴です。

〈教室の様子〉

はじめに、先生の周りに子どもたちが集まり、今日の手順を説明します。

その後は、誰が何を担当しよう、など口に出さずとも作業は自然に進んでいきます。先生が作業分担をしないことにより、大きい学年の子が入ったばかりの小さい子に、出来ることを自然に振ったり、手元を見守る姿も見られます。使った器具もグループの誰かが洗い、作りながら片付けながら調理は進み、完成後はみんなです。



この日のメニューは、ご飯、みそ汁、彩り豊かな野菜と鶏肉の蒸し煮と、副菜はひじきのサラダ。ポイントは手作りポン酢で、先生直伝の“憶えておくことと便利な配合”が伝授されました。自分たちで作ったお料理を、みんなで楽しく食べました。



←小さい子の手元を見守る中学生

〈先生に聞きました〉

子どもたちへの説明が端的で、敬語で話されていたことが印象的で、理由を聞くと「包丁を持って歩いたり、火を使ったり、集中していないと危険を伴うため、ちゃんと届くように伝えています。」とのこと。

工夫していることは、「手順を変えず、パターン化する」こと。1、2年繰り返していくと、次は何をするかがわかるようになるそうです。たしかに、次に何をしようかわからず困っているような感じの子は見当たりません。「とにかく手を動かすことで身につく」と話し、なるべく手出し・口出しせず、子どもたちが自分で考えて、作業に取り組む様子を見守っています。

先生の一番の目標は、一人で生活を始めたとき、ご飯が炊けてみそ汁が作れること。この基本の二つが作れば、コンビニに頼らずともごはんが食べられる。大人になって、自分で出来るか出来ないかで、その後の健康寿命が変わってくると言います。元々、成人教育を学ばれていた先生の想いは、生きていくために必要なことを身につけるといふ、子どもたちの未来を見据えた社会教育の根本のようでした。

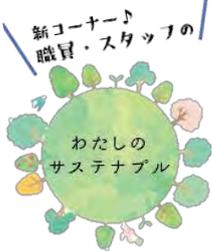
→切る作業はみんなで分担



ひの社会教育センターからのご案内

【生活の中で無理をしない意識改革】

日野社会教育センター 事業部長の渡邊和英です。日頃の業務は幼児から高齢者までの身体を動かす運動やスポーツの楽しさ(生涯スポーツ)を自分自身の経験を元に伝えさせてもらっているのと、一緒に活動することで自分自身の健康づくりにもなっています。



さて、今回記事の担当になって率直に思ったことは自分自身のサステナブル意識の低さでした。

今まで調べても考えても、どうも実感がわかないふりをしていましたが、たまたま聞いたラジオ番組でサステナブルは身近なところで無理をしない意識改革と聞いたことを思い出して、私が学生時代から続けていることが思い浮かびました。それは「値引きシールがついている食品を積極的に購入すること」です。

学生時代、陸上競技をしていて、一人暮らしをしていたので、食事面は自分で行ってました。練習を 20 時ごろ終えてスーパーマーケットにいくと惣菜に値引きシールが貼ってあり、身体づくりが資本の競技時代には安くたくさん食べられることは本当に助かるサービスでした。そんな学生時代に染みついた習慣は時がたっても変わらず、今でも値引きシールが貼ってあると買ってしまいます。学生当時は、「安くたくさん食べられる」そんな価値観でしたが、今では「食品ロス」という言葉に置き換えて取り組んでいます。学生の頃は賞味期限の切れた食品がどうなるかなどを考える機会はありませんでしたが、今では環境問題、地球を大切にすることを耳にすることが沢山あるので、限られた資源を自分が無理しない努力で地道に取り組んでいこうと思っています。

〈職員・渡邊〉



▲お子さんと。値引きシール付きお菓子も。

【スマイルタウンへの感想やコメントを募集します】

賛助会員の皆さまへお届けしているスマイルタウンは、今号で 333 号目の発行となりました。今号では賛助会費のご協力依頼を同封させていただきました。ひの社会教育センターの運営をご支援していただけますと幸いです。

スマイルタウンは、近年はひの社会教育センターで講座を担う講師を紹介したり、職員同志で対話をおとして社会教育を考え語ることで、皆さまへの事業報告のような役割を果たしてきました。

そこで！今後の『広報誌スマイルタウン』に期待することや、企画へのご感想、皆さまのエピソードなどを大募集します！お寄せいただいた方の中から、抽選で限定 1 名様に豪華プレゼントを贈呈。企画は今年度全 4 回予定しています。第 1 回目の今回は、長野県飯綱町の美味しいトウモロコシをお届け。

ご応募お待ちしております！（次号でのコメント掲載にご了承いただける方及び国内にご住所のある方）

応募方法：①Google フォームより→

②メールにて→ info@hino-shakyo.com

〔氏名・住所・電話番号をお知らせください〕



賛助会へのご協力ありがとうございます★順不同・敬称略

①個人会員 1口 1,000円

越智久子 5口 柿田雅子 30口 齋藤淑人 20口

中野 中 3口 廣本隆彦・碧 20口 高橋つや子 10口

②団体会員 1口 5,000円

いにしえ体操会 2口 うどの大木 2口

多摩平卓球サークル 20口

日野混声合唱団 1口 日野手品サークル 1口

モッキングバード 2口